



年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」



この絵は、2026年9月11日に帰天された
ミカエル 池田 雄一神父が遺されたスケッチブックからご提供いただきました

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

巻頭言

高山右近に学ぶ「統治者」のあり方

シナピスセンター長 松浦 謙



戦国時代の武将であった高山右近は高槻城の城主となり、託された領地を治め、統治する権威を持っていました。人々の上に立つ者としての彼の生き方から多くのことを学べます。ちなみに彼の洗礼名「ユスト」は義という意味ですが、一般の人々が考えるいわゆる「正義」ではありません。神が望んでおられる正しさです。すべての人のいのちは神様から与えられたもので、一人一人が犯すことのできない尊厳を持っています。右近はこの信仰に基づいて、ミゼリコルディア（慈悲）の組を作り、今でいう弱い人の立場に立った「社会福祉活動」を推進しました。死者の棺を自ら運んで弔い、その遺族や孤児、困窮する家族に手厚い保護をしました。

当然のことながら、彼自身、上に立つものとして難しい決断を迫られることがありました。右近の主君の荒木村重が、当時天下統一を目指していた織田信長に反旗を翻したのです。右近は村重に妹と息子を人質として預けていました。荒木村重に忠誠を尽くさなければ彼らの命は危機にさらされます。一方信長は右近が自分に従わないなら、領内のキリシタンや神父たちを殺害すると脅したのです。窮地に立った右近は、オルガンティーノ神父の助言を受けた上で、真剣に神の助けを祈りました。そして最終的には、武器を手放し自らの地位を捨てる決意で織田信長のもとに行き一切を返上して、高槻城を明け渡す道を選びました。

右近の対応に驚いた織田信長はキリシタン殺害を思いとどまり、右近を領主として復権させました。形勢不利と見た荒木村重は人質を解放して、逃亡しました。右近は人々のいのち（人権）を守るために自分を犠牲にすることを厭わなかったのです。

イエスが弟子たちに言われた次の言葉があります。

「諸民族の支配者たちはその上に君臨し、また偉い人たちが権力をふるっている。しかし、あなたの方の間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、あなたがたの中で頭になりたいものは皆のしもべとなりなさい。人の子が仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分のいのちをささげるために来たのと同じように」（マタイ 20:26）

教会は政治に携わる人、国を治める人のために祈ります。地上的な権力を持ち大きな責任を託された人が、一人ひとりの人権を守り、すべてのいのちを大切にし、神の義に基づいた正しい判断が出来ますように。





シナピス移動学習会に参加して 「戦争に巻きこまれる船員と家族の現実」



カトリック六甲教会 いかわ のぶこ 井川 伸子

9月5日(土)、14時から神戸中央教会で、現在カトリック難民移住者支援ネットワークに勤務されているフリーライターの大元麻美さんが、「戦争に巻きこまれる船員と家族の現実」というタイトルで実際に船長として勤務されていた大元さんのお父様と家族との体験をお話されました。

皆様もニュースでご存知の通り今、ホルムズ海峡はイランとアメリカの対立と緊張が続く中、封鎖と通行統制が敷かれ原油の輸送の安全ルートの回復には至っていませんが、今回の学習会では、その海上で命がけで運航を執る船員とその家族の苦悩に焦点が当てられました。

大元さんのお父様は実際に船員として長期にわたり海上勤務され1年の航海後、1か月休暇で、陸上勤務の時は横浜、神戸、長崎と転勤が多く、家族と一緒に過ごされた時間はほとんどなく、大元さんが一緒に生活されたのは、引退後の2年間だけだったようです。父親不在の中で、相談相手のいない母親が一人で決断しなければならなかったこと、子どもたちがそれぞれ寄宿寮で過ごし、家族が離れ離れになって孤独を感じたこと、今のように携帯やパソコンで連絡をとれない時代だったので、家族とのコミュニケーションを早くとりたい時に大変だったこと、たまに帰って来たときも、仕事続きで船長命令口調が家庭でも残り、父親に対しては幼い頃からあまりいいイメージを抱けなかったことなど、いろいろなお話をお伺いし、父親が長期不在の船員の家族は本当に様々な苦勞をされているのだなあと感じました。

しかし、参加者の中には、大元さんのご家族と長年お付き合いのあった方がおられ、船長のお父様に対しては責任感が強くとても包容力があり、優しい人でした、という意見もありましたが。

一番大変だったのは、海外勤務の1980年、イラン・イラク戦争の時期で、乗っていた「箱崎丸」^{はこさきまる}が突如として開戦初日に被弾し命の危険にさらされ、ホルムズ海峡近くのペルシャ湾沿岸に停滞を余儀なくされ、帰国までの5ヶ月間船長として船員全員を守らなければいけないという重責と、安全に帰国を待ち続けているその家族たちからの要求、不満などのバッシングなど、大元さんのお母様は、船長の妻として船員の無事を祈りながら神経が磨り減り、苦悩に満ちた毎日だったようです。音信不通のため、マスコミからは大元船長は死んだという誤報もあったようです。

外で命がけの航海をしている船長の父親像は小さいころからあまり接触がなかった大元さんにとっては、疎遠に感じられたのかもしれませんが、寄港先からそのつど家族に絵葉書を送っていたという船長の家族への思いは計り知れないものがあつたようにも思われました。

船員たちは、長い間、家族と離れてしまいましたが、人々が楽しく食事や娯楽を客船で楽しめるのも、私たちが生きていく上で必要な海外からの食料や物資を手に入るのも、海上で運航をつかさどる船員たちの陰の力が働いているのだということを忘れてはならないとあらためて感じました。



視覚障がい者への情報保障



たけざき ゆうこ
嶽崎 裕子

視覚障がい者(以下視障者)の教会でのミサ参加における情報保障について考えてみたいと思います。

視障者への情報保障は、「点字の用意」「音声の用意」によって、情報を伝えるとお考えと思います。が、視障者が教会でミサに参加する時、多くの情報をつたえていかなければなりません。

ミサに参加した視障者の方々から、お話を伺い、代表的なものを取り上げてみました。

- * 聖堂内の座席に案内される。でも、聖堂のどこに座ったのか、まったくわからない。祭壇の方向・距離など知りたい。
- * 拝領時、順番が判らないので、声をかけて欲しい。拝領後、自分の席まで誘導してほしい。
- * ミサが終わって、出口が判らない。
- * トイレの場所も教えてほしい。
- * 「神父さんにも紹介してほしいけど、贅沢言ったらいけないなあ」
- * いろんなこと、伺おうと思って、お話ししたのに、誰もいなくて、独り言を言っていたように見えて、ほかの方に注意された。恥ずかしかった。視障者から離れるときは、「離れます」と声をかけましょう。

教会内の情報を詳しく伝えることも、必須なのです。

『シノドス流の教会』(中央協議会)の63に障害者についての記述があります。

その文章の中に「私たちは、彼らの苦悩、疎外、差別の経験を知っています。時にはキリスト教共同体の中でさえ、パターンリスティック(父権主義・父が子に対するような管理方法などを言う)な憐憫の態度によってそれをあじわわされたのです。」という内容があります。視障者は、いつまでたってもお客さんの立場でしかミサに参加できない実態がまだ続きます。

一番大切なのは、視障者ご本人にどんな情報が必要なのかをしっかりと聞くことです。視障者と健常者が同じ教会の仲間としてミサに参加することは「イエスの思い」と一致すると思います。

障がい者差別解消法があるから情報保障など合理的配慮をするのではなく、「イエスの思いを行動として行う場づくり」をすることは、まさにシノドス流教会に近づいて行くのではないのでしょうか。

沖縄からのメッセージ

† 平和は聖なるもの 神のみ旨 絶えざる和解の旅（2026年 カトリック那覇教区の目標）

那覇教区 やまだ けいご
山田 圭吾

1978年頃、教区青年会の行事として那覇教区のミッションビーチで研修会を開催していたある夏のこと。夕日を見ながら談笑していた時、ものすごく赤い夕焼けになり、参加者たちは誰もがその美しさに見入っていた。ところが、指導司祭（沖縄出身初のカプチン・フランシスコ修道会員）が見あたらないので建物の中に行き、「夕焼けがすごくきれいですよ」と声をかけたところ、「僕は夕焼けが嫌いだ」と言われて驚いた。しかし、その理由を聞いて愕然としたのだった。

1944年10月10日。今でも「十・十空襲」と呼ばれる、米軍による大規模な空襲で沖縄、奄美の島々が焼け出されたのだったが、その時住んでいた那覇市の上空が真っ赤になっていたという。それ以来、夕焼けを見るのが嫌になったとのことだった。それを聞いたとき、このきれいな自然現象を見ても、戦争時を思い出して苦しむ人がいることに返す言葉もなく、ただただ悲しく、悔しく、黙って聞き入るだけだった。

1960年代、沖縄での精神病発生率がかなり高くなった。沖縄戦での体験や、戦闘状態が終わってもその後も精神的にも肉体的に苦しめられたことから、それらに耐えられなくなった人が発症したようである。沖縄戦ストレス症候群とかトラウマや戦争PTSDと言われる様々な症状は、戦後数十年経ってから出てくる場合もあり、それが、子や孫にも連鎖していることが報告されている。

沖縄の歴史の中に生きている私

1970年4月 「琉球政府立」那覇高等学校入学

1971年3月19日 日本国へ修学旅行

初めて行く「日本国」なのに、旅券には「日本国への帰国を証する。」とか、「本土と沖縄との間を旅行する日本人であることを証明する。」の記載。

鹿児島まで船で一泊、東九州縦断、山陽道を東へ。山梨県で初めての雪に感動。沖縄では着たこ

とのないコートを持参していたが、ある女子生徒は「品物が無かったのでレインコートで間に合わせた」と言うくらいで、みんな色が違っていた。およそ制服とは見られない状況も致し方無し。東京経由して奥日光へ。初めてのスキー体験。今でも「雪を見るのに憧れる」気持ちがあるが、それを言うと雪国の人に怒られる。中には、「沖縄の人は基地の被害を言うけど、雪の大変さは知らんだろ」と言う人もいるとか。しかし人力ではどうにもならない雪の災害と、撤去されれば無くなる人工の基地災害を同列で非難するのはいかなものか。

1972年5月15日「日本復帰」

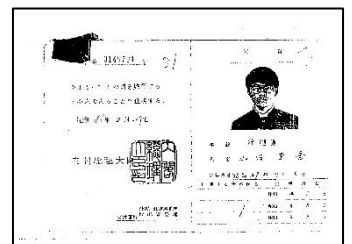
「琉球政府」から「沖縄県」へ。公的書類の表記が西暦から和暦に。ドルから円に。数年後には車が右側通行から左側通行へ。「唐の世からヤマトの世、ヤマトの世からアメリカ世、アメリカ世からまたヤマトの世」と歌われている「世替わり」の体験。

1973年3月「沖縄県立」那覇高等学校卒業

1975年7月「沖縄海洋博覧会」開催→海に特化された海洋博覧会に、「海のないバチカンが出館しているのはなぜか」の問いには「キリスト教宣教師は七つの海を越えて世界に繋がっていたから」との一つの答え。



初めての雪に感動した「日本国」への修学旅行。旅券（写真下）が必要とされた。



「虚偽情報」と「内なる差別」が生んだ惨劇



フリーライター おおもと あさみ 大元 麻美

1923年9月1日に起きた関東大震災の直後、被災を逃れた朝鮮人を虐殺するという凄惨な事件が起きて103年が経つ。1世紀以上が経っても、全容が分かっていない“未解決事件”だが、大韓民国臨時政府機関紙『独立新聞』が留学生らを使って震災後に現地調査をした報告(1923年12月5日付)によれば、6661人の朝鮮人が殺されたという。また中国人や朝鮮人と間違われた日本人も殺害された。

この虐殺事件は主に東京で発生したと思われるが、実際は震源地である神奈川県内が最も多く、被害者数は全体の半数以上を占めている。横浜市南区の中村川では、一人の朝鮮人を大勢で取り囲み、頭や体、目などを竹やりやサーベルで小突き回し、耳をそぎ落とし、足の甲を切り裂き、なぶり殺しにしたという凄惨な事件が起きている。

このようにして惨殺された朝鮮人の血まみれの遺体は、中村川の川沿い約1キロの200以上の木につるされ、川は真っ赤な血の濁流となっていた。カンドクサン(姜徳相・山本すみ子共編『神奈川県 関東大震災 朝鮮人虐殺関係資料』参照)

まさに地獄絵と言えるこうした大惨事が、インターネットがない時代に、なぜ関東全域で同時発生的に起きたのか。それは以下の流れになる。

「内なる差別」意識を持っていた市民の一部が、被災した原因を「朝鮮人が放火した」などと勝手になすりつけ、デマ(流言飛語)を流した。

一方、当時の内閣は、大震災をきっかけに、生活困窮にあえぐ民衆が権力に反旗を翻すのではという懸念や、植民地支配以来、差別・迫害されていた朝鮮人の人々が抵抗して立ち上がったらどういう事態を巻き起こすのかとい

う恐れを抱いていた。

そこで治安を維持するために、「どこからともない流言」を否定しないどころか、むしろ便乗して、内閣単独の責任で「戒厳令」を発動。その4年前に起きた「3・1 独立運動」の衝撃を受けていた政府は、「朝鮮人が不法行為を行っているので取り締まるよう」指示し、デマを伝播、自警団を組織させた。これを受けて関東全域で軍人や警察、そして自警団や市民が一緒になって虐殺行為に及んだということだ。(姜徳相著『新装版 関東大震災』参照)。

この流言の拡散を支えた官報ならびに民間の新聞の責任も実に大きいと指摘せざるを得ない。

昨年、韓国では注目すべき一つの法律が成立した。「関東大震災朝鮮人犠牲事件の真相究明と犠牲者の名誉回復に関する特別法」(以下「特別法」)で、今年12月末に施行される。そして今年8月31日には東京・参議院議員会館で、初の日韓議員懇談会が開催され、この「特別法」が事件の真相を明らかにし、犠牲者の名誉を回復するための法律であること、そして二度と同じ過ちを繰り返さないために調査を進めることを目的とすることが確認された。

日本では、事件の真相を究明する研究者や市民が中心になってこの朝鮮人惨殺事件を長年にわたって調査・研究してきたが、日本政府は関東各地の犠牲者について、殺害場所、人数、名前、遺骨の行方などについて、今もその全容を隠蔽し続けている。

103年前の惨事は、現在の入管による外国人への締め付けなどにも根底でつながっている。この「特別法」によって、隠されてきた資料が開示され、全容解明の一助になることが期待されている。

映画『ヒンド・ラジャブの声』を観て

衝撃の6歳の少女の声 決して忘れない 忘れてはいけない。

2024年1月29日、世界が傍観した“6歳の少女の声” その叫びに懸命に向き合った人たちがいた。魂が震える「89分」 (映画『ヒンド・ラジャブの声』公式サイトより)

や お 八尾教会 くらさわ ひさお 黒澤 久夫

最近 Gaza の状況に関するニュースが少なくなっている中、シナピスニュースペーパーで「ヒンド・ラジャブの声」の上映を知りました。近くの映画館は上映日も少なく、一日2回の上映だったので早朝の回に行くと私を含めて5名の鑑賞者が訪れていました。

上映が始まると、記録された少女の声を相手に、状況に合わせて俳優の方たちが演じていることに気づき、これは「ドキュドラマ」という表現方法だと後で知りました。90分間、エンディングの字幕が終わるまで集中して耳を澄ましてしました。

近くをたびたび近づいてくる戦車の音、「私を撃ってくる。戦車が来る。あたし、死ぬの?」と悲痛な少女ヒンド・ラジャブの声が問いかけてくる。沈黙のたびにもうだめかと失望感が襲ってくる。

通話が始まるとまだ生きているのだと安堵する。電池残量は大丈夫か気にかかる。通話が継続されると早く救出を求めて奔走するスタッフたちの苛立ちが伝わってくる。たった8分で行ける場所の距離が遠い道のりで拒まれているためにジレンマを共有していく。一人の少女の声を通して紛争・侵略・戦争のむごさがいたたまれない。

多くの命を無残に奪い、家族を殺害され、自らも車中に355発の銃撃を受け恐怖の中で命を奪われていった6歳の少女。救出の許可が出てむかったさきで無念にも命を奪われた救出隊員の痛ましさを忘れない。今でもGazaでは崩れかけた建物に住まいながら命を奪われている人々があり、殺戮は現在進行形で続いている。

ウクライナ・ロシア、中近東の紛争は人間が操る無人機やドローンで破壊が続く。日本では無関心層が多数を占める中で、向き合うとはどういうことか自問を繰り返している。

や お 八尾教会 え み れいこ 江見 玲子

シナピスニュース9月号をごらんになった信者さんから「見てきたよ」と教えていただき、早速私も行ってきました。

私が、テレビニュースを見て想像していたGazaとは全く違い、はるかに、ひどい状況でした。こんなにひどいなんて、知りませんでした。

家族親類が乗った自動車が襲撃され、大人は殺され、生き残った子どもにも銃口が向けられる。その助けを求める声が電話から聞こえてくる。こわいと、叫ぶ声を聞いて、救急隊を向かわせようとするが、どうにもならない。そして、全てを焼き尽くし、何も残らない状態まで徹底的に奪い尽くす。苦しみ悲しみが残されていく。

私が読んだ10年前に書かれたGazaの本にはまだ、希望が少しは感じられました。けれども、今、この現状に、Gazaの人たちは、希望を持ち続けることができるのだろうか、そう感じずにはいられません。わたしたちは、Gazaの全ての命が危険にさらされていることを知しましょう。そして、何ができるのか考えましょう。そういうことを考えさせられる映画でした。



震災から1か月半の 熊本を訪問しました！

聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会

Sr. マリア・ラン

「9月12日から3日間、駆け足で熊本を訪問してきました。きっかけは、ボートピープルとして日本にたどり着き、熊本の難民キャンプでお世話になり、今はアメリカで暮らすベトナム人の共同体（マリア・ランのお姉様もその中の一人）から55万円の義援金を預かったことです。この気持ちを早く届けたいと思っていました」

「大きな食品会社に研修生として来ていたベトナム人女性6名とインドネシア人男性20名は、会社の操業が止まり仕事を失い、社宅にも住めなくなりました。会社は、社員数名ずつ新たな就職先を探して斡旋してくれていますが、それまでの収入が途絶えた暮らしが心配です」

「^{うき}宇城市^{とよのまち}豊野町の山中で3名のベトナム人農業研修生と会いました。社長さんがいまだに車中で寝泊まりする中、彼女たちは不衛生で冷房のない老朽化した家に住んでいます。雨が降ると天井から水が流れ落ち、床はべたべたの状態でした。そこは本当に町から離れた山の中で、支援の手もなく、ひたすら我慢して耐えているだけの様子でした」

「他にも、小さな赤ちゃんを抱えたシングルマザーは、毎日の生活の中で多くの困難に直面しています。コンテナに住む別の家族の中には、家の倒壊で頭に大きな怪我をして救急搬送された若いお母さんがいました。今回は様子を見て話を聞かせてもらうだけでしたが、仕事と家を失った外国人たちが、早く元の暮らしに戻るために必要な具体的な助けは何か。被災者たちと連絡をとりながら考えます」（聴き取り：大森）



本の紹介コーナー

『戦争を甘く見る空気 1930年代と似た道を進む現代日本』

（山崎雅弘 朝日選書 950円＋税）



決して楽しい本ではありません。むしろ、確かな寒気を覚える本でした。

帯には、「日中戦争が始まった頃と現代の日本には、奇妙に類似する面がいくつもある。物価高騰、軍備増強、自尊心の揺らぎ、外国人蔑視、強い指導者への憧れ、情報統制する政府、戦争を煽るメディア——。」とあります。

「いやいや今の日本がそんなに深刻？ ちょっと大げさじゃない」と、読み終えてまだ思えるか、ぜひ感想をお聞かせください。

私は、戦争とは反対のベクトルの生き方を教えてくれる本だと思いました。

生成 AI 翻訳機能のイエとこアカンとこ

モロッコ、ガーナ、ギニア、中国、チュニジア……。ここ 1 年だけでも実に多様な出身国の人に出会う毎日です。シナピスでは初動の対応を 2、3 人のスタッフでこなすのですから、いかに AI 翻訳機がありがたい存在か想像していただけるでしょう。

AI のお陰で私たちの活動は時間とお金の労力を省けるようになりました。海外出身者が突然やって来ても、あたふたせず AI を使って取り急ぎの会話ができるからです。それも AI 翻訳では敬語でのやりとりを選べるので、初対面にふさわしく、お互い「礼儀正しい人」との好印象を持てる点も有益です。

一方で危惧する点があります。AI の優れた機能に頼りすぎて、日本語の学習意欲が落ちる人が増えたのです。来日してから一年以上になるのに「おはよう・すみません・ありがとう」程度の挨拶しか交わせない人がいます。一般的に多言語習得能力が高いとされるイラン人たちでさえ、若者を含めて会話の上達が遅いと感じるようになりました。AI に頼り、五感を使って意思疎通をはかる努力をしなくなったせいではないかと思います。

それとも、世界はもはや語学を勉強する必要がなくなりつつあるのでしょうか。



動画電話でこんにちわ

携帯電話で電話をかけるとき、通常は固定電話のように耳に電話機をあてるかスピーカーにして通話します。ビデオ通話を使うのは、遠く離れてなかなか会えなかったり、しばらくぶりの懐かしい人と話したりする場合などでしょうか。ビデオ通話にしたい時は、お互いの同意を得てから動画モードに切り替えるのがマナーかと思います。たまに初めからビデオ通話で電話をかけてくる人がいると、こちらが慌ててしまいます。

私が一番焦ったのは、ミャンマーのある政治家から国際電話がかかってきた時でした。自宅で掃除をしている最中に着信があり、緊張してよそ行きの声で受けたら、相手は既にビデオ通話モードで「さあ、あなたの顔見せて下さい」と言うのです。よれよれのTシャツで汗だくだった私は「ご勘弁を」と辞退するのに苦労しました。

私の夫は日曜の朝に時差 14 時間のペルーに電話をします。もちろんビデオ通話です。電話の向こうで家族が次々に出てきて懇ろに挨拶します。困るのは「アツコは？」と聞かれた時です。「ここだよ」と受話器を私に向けようとする夫に私は「寝起きでパジャマやっちゅうねん」と制するのに必死です。ある日、電話のあとに夫に言われました。「きれいなカッコしないと挨拶もできないのか」「うん、当たり前でしょ」「ペルーの家族を見てごらん、誰も着飾って電話口に出てこない。部屋着のまま、ご飯食べながら、テレビ見ながら、次々に顔を見せる。私たちの無事をただ尋ねてくれているだけなのに、隠れるあなたは失礼な人だ。」夫が言いたいのは、素のままでいられるのが家族なのに、挨拶よりも身だしなみを優先する私はペルーの家族に対してよそよそし過ぎる、だったのです。

物理的な距離じゃない、関係性の距離感に夫は寂しい思いをしたのでした。

このカボチャは、輪島在住の合田さんという独りのおばあさんが丹精込めて作ったものでシナピス活動のために提供して下さいました。シナピスではこの売上を熊本のカボチャプロジェクトに寄付します。

「能登のかぼちゃ」 完売御礼

先月号で紹介したかぼちゃ、無事にさばくことができました。最後は、申し出をお断りしたり、数を減らせていただく、うれしい事態となりました。協力、関心を寄せてくださったすべての皆さまに感謝いたします。最終額はまだですが、**20万円前後**を熊本にお届けできそうです。



シナピスホーム（カフェ） 10月の予定

カフェ：10、24日

★土曜日の13時頃～16時頃

場所：生野区中川6丁目6-23

☎ 080-8940-8847

難民移住者と語り合おう！難民移住者がもてなすカフェを開催しています。

インターナショナル・デー INTERNATIONAL DAY

外国人が暮らしやすい社会をめざして！
各国料理の出店・歌や踊りのステージ

2026. 10. 18 Sun

大阪高松カテドラル聖マリア大聖堂



11時～ 国際ミサ

12時半～ 交流会

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。
☎06-6942-1784

あとがき

シルバーウィークの一日。昼過ぎに神戸で『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？』、夕方から梅田で『ヒンド・ラジャブの声』を観てきました。無茶なことをしました。殺す側にも、殺される側にも、そして、傍観する側にも立ってはいらないと、心に刻みました。今は、ヒンドちゃんの声が、私の心の奥底で静かに響いています。（大森）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約800m

JR 玉造駅より 約1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら ➡➡➡

